高齢者の社会的孤立のライフコース的要因に関する事例分析
—「累積的な有利・不利」からみた予備的考察—

斉藤　雅茂
（上智大学大学院総合人間科学研究科）

<要　旨>

本研究では、少数の事例調査の結果をもとに、ライフコースを通じての不利の累積という観点から高齢者の社会的孤立の背景と孤立群および非孤立群の関連要因について予備的な分析を行った。調査は、2006年3月に東京都N区の単身高齢者を対象として、訪問面接法を用いて実施した。調査対象者の選定は、高齢者向け区営住宅の管理人に依頼し、17名の有効回答が得られた。ライフコース上の背景の分析には、各事例について高齢期と高齢期以前に経験した社会経済的に不利な出来事を整理した。そのうえで、ブール代数アプローチを用いて、孤立群と非孤立群に該当する高齢者の関連要因を検討した。その結果、1)高齢期の社会的孤立は、幼少期からの不利の累積で形成されるという累積的な有利・不利仮説を支持する事例が一部で確認されること、2)他方で、少なくとも、高齢期の社会的孤立との関連においては、そうした「生涯を通じて不利が累積した孤立」と同時に「高齢期の不利による孤立」があること、3)高齢期の孤立状態を規定する単独の要因はみられず、婚姻経験や親しい友人・知人の喪失、本人の健康状態の変化やサークル等の社会活動への参加状況の組み合わせによって規定される部分があること、が示唆された。

<キーワード>
高齢者、社会的孤立、ライフコース、累積的な有利・不利、ブール代数アプローチ

【はじめに】

近年、わが国では、介護保険制度実施の下で、高齢者の介護問題には強い関心が寄せられている。しかし、高齢期には、介護のような、主に心身機能の障害にかかわる問題だけではなく、生活全般にかかわる多様な問題がある。なかでも、孤独死に代表されるような高齢期の社会的孤立の問題は、政府調査が一部で行われているものの、国内において研究の蓄積は乏しく、その政策的対応も大きく立ち遅れている。

これまでの高齢者の社会的孤立に関する研究結果を要約すると、全ての高齢者が孤立しているわけではなく、その発現率は10%前後であること(Victor et al. 2000、Findlay et al. 2002)、他者との交流が全くないという意味で「極端に孤立している(extremely isolated)」高齢者は全体の4～5%と極めて少数であること(Shanas et al. 1968、La Veist 1997)が確認されている。

また、女性よりも男性の方が退職後の友人関係が乏しく(Lowenthall 1964、河合ら 2006)、高齢であるほど同世代の人より長生きをした結果として孤立しやすいこと(Mullins et al. 1991、Wenger et al. 2004)、孤立状態にある高齢者の大半は単身世帯であること(Tunstall 1966)、孤立状態は寂しさや生活不満足などの精神的健康に負の影響を及ぼすこと(Thompson et al. 1990)、などが明らかにされている。

一方、高齢者の社会的孤立の要因に関しては、Findlay et al.(2002)は、高齢期には、1)親しい他者の喪失、2)身体的な不健康、3)精神的な疾患(抑うつ)、4)要介護状態、5)情報へのアクセス能力の低さ、6)使用する言語的背景の差異、7)居住地域の差異(都市部と農村部)、8)高齢者施設への入所、9)他者への恐怖感、10)性別と婚姻状態、11)地域住民の高齢者への態度、12)移動手段の減少などのリスク要因があることを示している。しかし、これまでの研究では、そうした孤立状態の要因に関して、高齢者個人が経験してきた

ライフコースという観点から検討した研究はほとんど行なわれていない。

とくに、近年、欧米の社会老年学は、高齢期の多様性や異質性の議論のなかで、高齢期のみを抽出するのではなく、高齢期に至るまでのライフコースに注目することの意義が強調されている。なかでも、世代内の格差に関する分析枠組みとして、累積的な有利・不利(cumulative advantage disadvantage)という概念が注目されている(Crystal et al. 1990、O'Rand 2002、Dannefer 2003)。この概念では、高齢期の生活状態が、過去に経験した人生の軌道(trajectory)のなかで取得された社会経済的地位や経験における連続的な有利・不利によって形成されているというプロセスに着目する。

そこで、本研究では、少数の事例調査の結果をもとに、ライフコースを通じての不利の累積という観点から、高齢者の社会的孤立の背景と孤立状態・非孤立状態の関連要因について、予備的な分析を行った。

なお、孤立状態の定義は多様であり、家族関係と地域関係の疎遠状態から操作化した研究(後藤ら 1991)や社会的孤立と情緒的孤立を分類した研究(Dugan et al. 1994、Thompson et al. 1990)などがある。そのうち、本研究では、社会的孤立を「家族や地域とほとんど接触のない状態(Townsend 1957)」と定義し、高齢者のネットワークの規模とその交流頻度から操作化した。

【方　法】

1．調査の対象

本調査は、東京都N区の高齢者向け区営住宅に居住する単身高齢者を対象とした。調査対象者の選定は、各区営住宅(4 箇所)の管理人(ワーデン)に依頼し、比較的、他者との交流が乏しい単身高齢者に協力を求めた。その結果、最終的には、17名の回答が得られた。回答者の平均年齢は79.5歳(72－86歳)、性別は男性が6名、女性が11名であった。回答者の基本属性と概要は**表1**の通りである。なお、高齢者向け区営住宅の入居には、住宅に困窮していて低所得であるという要件があるため、本事例では、比較的低所得者が多く、全ての高齢者が高齢期に転居しているという点で特徴がある。

なお、倫理的配慮として、調査実施に際しては、全て事前に調査目的と方法、個人情報保護の旨を明記した文書を送付し、調査協力の同意が得られた方のみを対象としている。

2．調査項目・分析方法

調査は、2006年3月に、半構造的面接法により行った。主な調査項目は、**(a)**現在の生活状態として、親しい交流関係の内容、地域活動への参加状況、健康状態の変化、経済状態、**(b)**ライフコース上の要因として、転居歴、学歴、家族歴、職業歴などである。

1）社会的孤立の操作化（孤立群／非孤立群）

前述の通り、社会的孤立の操作化には、高齢者のネットワークの規模とその交流頻度を用いた。ネットワーク規模は、「心を打ち明けて、自分の思っていることや、心配ごとを話すことができる親しい友達は何人くらいいらっしゃいますか」「お互いに家に行き来するような間柄のご近所の人は何人くらいいらっしゃいますか」のそれぞれについて、人数を実数で尋ねた。一方、交流頻度は、「離れて暮らしているお子さんを全部合計して、大体何回くらい会ったり、電話

表１　回答者の基本属性と概要

No	性別	年齢	孤立状態	婚姻経験 未婚	離別	死別	子の有無	単身年数	居住年数	経済状態 a)	最長職	概　要
1	女性	84	孤立	○	－	－	－	50	15	－	専門職自営(洋裁)	健康に自信がない。友人との交流は年賀状程度。連絡は親戚のみ。
2	女性	75	孤立	○	－	－	－	40	7	－	一般事務員	1人の方が気楽。きょうだいの縁を自ら切って現住宅へ転居。
3	男性	82	孤立	○	－	－	－	24	15	－	一般事務員	職場時代の友人と死別。現住宅に転居後、親しい人なし。妹のみ。
4	女性	82	孤立	－	－	○	－	29	15	－	自営業(販売店)	50代に放火で家族と財産を失う。最近は腰痛で友人等と会えなくなる。
5	女性	83	－	○	－	－	－	53	13	低所得	一般事務員	10代から短歌の会で活動中。緊急時は、職場の後輩が世話をしてくれる
6	女性	81	－	－	○	－	有	41	3	低所得	家政婦	転居後も以前の友人が継続。３人の妹からも頻繁に連絡あり。
7	男性	78	－	－	○	－	有	43	3	低所得	塗装職人	ホームレス経験あり。昔の仲間と縁を切り、現在は近隣に友人が多い。
8	女性	75	－	－	○	－	有	7	7	低所得	主　婦	60歳で離婚。子どもから頻繁に連絡あり。趣味活動が多くて休みがない
9	女性	75	－	－	－	○	有	13	8	－	主　婦	障害手帳４級。きょうだいは全員近居。以前の地域の人と交流あり。
10	男性	86	孤立	－	○	－	有	21	10	－	会社経営者	極端な孤立。50代で破産し、離婚された。他人はみな信用しない
11	女性	82	－	－	－	○	－	16	10	低所得	清掃員	職場の友人等はいない。現住宅に転居後、近隣に友人ができた
12	男性	72	－	－	○	－	有	13	8	－	会社管理職	離婚後子どもと連絡なし。長年続けているカラオケと卓球の仲間がいる
13	男性	76	孤立	－	○	－	有	37	9	低所得	派遣労働	極端な孤立。もともと特定の親しい人はいない。人との付き合いは面倒
14	女性	77	－	－	○	－	－	33	8	－	給食調理員	きょうだいや職場の友人が近くにいるため、現在も頻繁に連絡あり。
15	女性	81	孤立	○	－	－	－	15	13	－	一般事務員	同居の父母、職場の同僚と死別。今はテレビが友達。一人で寂しい
16	女性	81	－	－	－	○	有	4	17	－	一般事務員	子どもは遠方で連絡なし。同じ棟の人と一緒によく外出する。
17	男性	82	－	－	－	○	有	12	1	低所得	自営業(飲食店)	以前のお客とほぼ毎日会う。子どもが近隣で自営業をしている

a) 生活保護の支給額を考慮し、1ヶ月の収入が10万円未満を「低所得」とした。

や手紙のやりとりをなさいますか」「何回くらい、友達やご近所や親戚の方と、会ったり、一緒に出かけたり、お互いの家をたずねたりしますか」のそれぞれについて、「まったくない」「1ヶ月に1回より少ない」「1ヶ月に1回くらい」「1ヶ月に2、3回」「1週間に1回くらい」「1週間に2回以上」の6件法で尋ねた。

そのうち、ネットワーク規模をあわせて「1人」以下、かつ、交流頻度が「1ヶ月に1回くらい」以下の両方に該当した事例を「孤立群」とし、それ以外を「非孤立群」とした。その結果、本調査の事例では、7ケースが孤立群に該当した。

2）ライフコース要因

ライフコース上の要因は、ライフイベントスケール(下仲ら 1995)を参考にして、高齢期以前におこる社会経済的に不利な出来事を「親との早期死別」「低学歴(高等小学校を卒業していない)」「未婚」「配偶者との離別」「配偶者との死別」「最長職が非正規雇用」「長期の失業状態」「転職が多い(2回以上)」「暮らし向きの急変(財産の喪失、破産等)」「長期間の入院」「遠距離(県外)の転居」に整理した。同様に、高齢期の出来事を「配

偶者との離別」「配偶者との死別」「同居の親との死別」「子どもがいない(死別を含む)」「きょうだいがいない(死別・絶縁)」「暮らし向きの急変(財産の喪失、破産等)」「健康状態の悪化」「親しい友人の転居(入院)・死別」「サークル活動・老人会等への不参加」に整理した。その上で、各事例について、ライフコース上の不利な出来事の累積状況を検討した。

3）ブール代数アプローチ

つぎに、高齢期の孤立状態と非孤立状態に関連する要因を検討するために、ブール代数アプローチを用いた。

ブール代数アプローチとは、ブール代数の理論をもとに、Reigan(1987)によって、社会科学における質的比較方法として考案された分析手法である。具体的には、使用する変数をすべて 2 値データ(0 or 1)に変換し、真理表、標準積和形、最小項、主項、必須項を求め、ある結果に対する原因条件の組み合わせを論理的に導き出すものである。論理式の計算手続きの詳細は、Ragin(1987)や鹿又ら(2001)に記されている。

この手法の特長は、従来の計量的研究における変数指向アプローチと質的研究における事例指向アプローチのそれぞれの欠点を踏まえ、「分析自体が客観的で、体系的な比較ができ、社会現象の多様性と因果関係の複雑性を把握できる」(鹿又ら 2001)という点にある。

本研究では、事例検討の結果をもとに、婚姻経験と健康状態、親しい友人の喪失経験、社会活動への不参加の組み合わせによって、高齢期の孤立状態および非孤立状態との関連を分析した。分析には、FS/QCA(Fuzzy Set Qualitative Comparative Analysis)を使用した。

【結　果】

1．ライフコース上の不利の累積

表２は、各事例について、該当するライフコース上の不利な出来事を整理した結果である。この結果、まず、幼少期から複数の社会的な不利（親との早期死別、低学歴、未婚・離婚、不安定な就労・長期失業、破産等の財産上のトラブル、不健康など）が累積して高齢期に孤立群に該当する事例(No.1、2、13)と、それらをあまり経験せず高齢期に非孤立群に該当する事例(No.5、6、8、9、12、16、17)が確認できる。そのうち、たとえば、No.13 と No.9 の事例を要約すると以下の通りである。

事例１（No.13：孤立群：男性・76 歳）

京都府生まれ。4 人きょうだいの長男。10 歳の時に父親が病死する。「何しろ家にいるのが苦痛だった」と話しており、小学校を卒業後、家出をして船員見習いになる。戦時中は軍事物資の輸送に従事し、終戦後もしばらく船員を続けていた。その後、25 歳で上京して運送会社に転職する。30 歳の時に、結婚と同時に、水道工事業に転職する。この頃に、2 人の子どもが生まれる。しかし、39 歳で離婚し、離婚後は、子どもとの付き合いは全くなくなる。水道工事業を数年で辞めた後、派遣会社に転職する。この当時は景気が良く、毎晩一緒に遊ぶ麻雀仲間が数名いたが、その人たちは遊び仲間であって、とくに親しい関係ではなかった。派遣会社の仕事を 63 歳まで続け、退職後、区営住宅に転居した。職場関係は「もともと寄せ集めの集団だった」ため、退職後に連絡を取り合う人はいない。最近は、たまに老人会でカラオケをしに行くが、持病のために活動的な参加はできなく、老人会に特定の友人がいるわけではない。近所での付き合いについても、「ずっと一人でやってきたし、お互いに家を行ったり来たりするのは煩わしいし、一人の方が気楽」と話しており、特に親しい人はいない。

事例２（No.9：非孤立群：女性・75 歳）

東京都生まれ。4 人きょうだいの次女。小学校時代は勤労奉仕に勤め、終戦後、高等小学校を卒業し、

表2　ライフコース上の不利な出来事の累積

		孤立群							非孤立群									
		No.1	No.2	No.3	No.4	No.10	No.13	No.15	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.11	No.12	No.14	No.16	No.17
		女性 84歳	女性 75歳	男性 82歳	女性 82歳	男性 86歳	男性 76歳	女性 81歳	女性 83歳	女性 81歳	男性 78歳	女性 75歳	女性 75歳	女性 82歳	男性 72歳	女性 77歳	女性 81歳	男性 82歳
高齢期以前	親と早期死別（幼少期）		○	○			○				○					○		
	低学歴						○				○			○				○
	未　婚	○	○	○				○	○									
	配偶者との離別						○			○	○					○		
	配偶者との死別				○													
	最長職が非正規雇用						○			○	○	○		○				
	長期の失業状態	○	○				○				○					○		
	転職が多い（2回以上）	○				○	○	○			○	○		○			○	○
	暮らし向きの急変（財産の喪失、破産等）				○											○	○	
	長期間の入院		○					○	○									
	遠距離(県外)の転居	○	○		○	○	○		○	○	○	○		○	○	○		○
高齢期	配偶者との離別					○						○			○			
	配偶者との死別												○	○			○	○
	同居の親との死別			○	○			○										
	子どもがいない(死別を含む)	○	○	○	○			○	○					○		○		
	きょうだいがいない（死別・絶縁）		○			○	○		○		○			○			○	
	暮らし向きの急変（財産の喪失、破産等）					○									○			
	健康状態の悪化	○	○		○	○	○				○		○			○		
	親しい友人の転居(入院)・死別	○		○	○	○	○	○						○	○		○	
	サークル活動・老人会等への不参加	○	○	○	○	○		○		○	○		○			○		○
	高齢期以前の該当数	4	5	2	3	2	7	3	3	3	7	3	0	4	1	5	2	3
	高齢期の該当数	4	4	4	5	6	3	4	2	1	3	1	3	4	3	3	3	2
	不利な出来事の該当数	8	9	6	8	8	10	7	5	4	10	4	3	8	4	8	5	5

父親の紹介で印刷会社の事務員となる。事務員の仕事は、その後15年間続ける。30歳のときに、出版会社に勤めていた夫と結婚し、都内で住宅を購入して夫と義母の3人で暮らし始める。結婚後、2人の子どもが生まれてからは専業主婦になる。とくに、この時期に、近隣で親しい友人が多くでき、自宅が近所の人たちの溜まり場になっていた。その後、50代の頃に、義母と死別し、子どもがそれぞれ離家したため、夫と2人暮らしになる。62歳で夫と死別後、一人暮らしになり、区営住宅に転居した。数年前に股関節骨折になり、それ以来、外出がやや困難になってきた。このため、現在は老人会等の地域活動に参加していない。しかし、これまでに県外の転居経験がなく、現住宅へ転居後も、近隣には学生時代の友人や子どもを通じて知り合った友人など、昔からの親しい関係が継続している。また、子どもが泊まりに来るだけでなく、きょうだいが全員近隣にいるため、親戚関係からの連絡も頻繁にある。

事例1の場合、幼少期の父親との死別に始まり、家出によってきょうだいとの関係が途切れていること、不安定職への従事と転職が多いこと、30代での離婚と子どもとの絶縁、職業柄もともと特定の親しい友人を形成してこなかったこと、などの複数の社会的な不利な出来事が累積し、高齢期に孤立状態にあるといえる。これに対して、事例2の場合は、高齢期に股関節骨折という健康状態の悪化があるものの、一定の学歴があること、本人も配偶者も安定的な職業に従事してきたこと、婚姻経験があって子どもがいること、長距離の転居経験がなく、きょうだいが全員近居で、学生時代や近隣関係の友人関係の継続していることなど、とくに社会的に不利な出来事を経験していなく、高齢期に非孤立状態となっていた。これらは、高齢期の生活状態が幼少期からの不利・有利の累積で形成されているという意味で、累積的な有利・不利仮

説を支持する事例といえる。

他方で、高齢期以前には不利な経験をほとんどしていないが、高齢期に親しい友人やきょうだいと死別・転居、本人の健康状態の悪化、財産上のトラブルなどが集中して孤立群になったといえる事例(No.3、4、10、15)がみられた。また、その逆に、幼少期から複数の不利を経験しているが、高齢期の生活上の変化によって非孤立群に該当した事例(No.7、11、14)がみられた。このうち、孤立群の No.10 と No.15、非孤立群の No.7 の事例を要約すると以下の通りである。

事例３（No.15：孤立群：女性・81 歳）

東京都生まれ。4 人きょうだいの次女。父親は会社員をしていた。高等小学校を卒業後、15 歳で郵便局の事務員になる。しかし、20 代前半で肋膜炎に罹り退職する。その後、長期間、入院と自宅静養のために、実家で両親と弟家族と同居し、婚姻経験はない。33 歳で再就職し、数回転職をするが、事務職を 57 歳まで続ける。40 代の頃から、弟家族が別居したため、長い間、父母との 3 人暮らしであった。退職後は、父親の介護に専念し、父と死別後、母親と 2 人暮らしになる。その後、66 歳で母親が亡くなり、1 人暮らしになったため、区営住宅に転居する。60 代までは、職場の友人やきょうだい・従兄弟と頻繁に連絡を取っていたが、その後、それぞれ健康状態の悪化によって、徐々に連絡を取らなくなる。とくに、職場の友人の多くは、この数年の間で死別した。このため「今はもう友達は全然いないです。子どもがいれば、いいんだけどね」と話している。区営住宅に転居後、近隣で仲の良い友達ができればいいと考えていたが、実際には、名前も分からない状態で親しい人はいなく、現在は、毎日、1 人でテレビを観て過ごしている。

事例４（No.10：孤立群：男性・86 歳）

広島県生まれ。5 人きょうだいの長男。実家の酒屋は地域で一番大きな商店だった。高等学校まで進学し、その後、幹部候補生として護衛団に入団する。終戦後、25 歳で造船業の会社を立ち上げる。28 歳で結婚し、子どもは 2 人生まれる。結婚後は、妻を社長にして、収入の大半を妻に譲っていた。「この頃は、バブル(景気)の中で、とにかく儲かりましたね。土地も株も随分やりました。とにかくお金はいっぱいありましたから」と話すほど、順調に展開していた。しかし、50 代後半に息子の事業が失敗して倒産し、任意破産となる。破産後、職を求めて上京するが、間もなく妻から離婚を申し込まれる。その結果、60 歳で離婚して、一人暮らしになる。離婚後は、子どもとの連絡も途絶えてしまう。「人間、金がなくなると離婚されちゃうんだからね。これがあってから人を信用するのが馬鹿らしくなった」と話しており、その後は、職場の友人やきょうだいとの連絡も一切取らなくなる。その後、家賃の支払いが困難になり、73 歳で区営住宅に転居する。数年前から、徐々に歩行が困難になり、現在では 1 日中自室で過ごすことが多い。

事例５（No.7：非孤立群：男性・78 歳）

神奈川県生まれ。8 人きょうだいの 7 番目。小学校に入学後、9 歳の時に父親が病死する。その後、10 歳の時に満州へ転居するが、間もなく母親が病死し、きょうだいはシベリアで死亡する。終戦後、18 歳で単身帰国するが、住む家も仕事もなかったため、建築作業員の住み込みに従事する。その後、26 歳で自動車工場、30 歳で塗装職人に転職する。31 歳で結婚をするが、子どもはいなく、4 年後に離婚している。「当時、職人は手ぬぐい一本持って、一箇所に長く居ないもんだった」と話しており、その後も現場を転々とした結果、50～60 代をホームレスとして過ごすことになる。70 歳の時に、自立支援センターに入所し、生活保護を受給し始める。しかし、「この頃の仲間は、1 日おきに誰かがけんかして大騒ぎだったし、金がなくなるとたかってくるし、ろくな連中じゃなかった」と話している。その後、センターの職員の紹介で 3 年前に区営住宅に転居する。転居後は、一人暮らし同士で近隣に親しい関係を形成し、「今はお金にも家にも困ってないし、近所の人たちはみんな思いやりのある人ばかりだからね、今が一番幸せだね」などと話している。

以上のように、孤立群に該当した事例 3 では、20 代に長期の入院経験をしているが、仕事は安定的な職業に従事し、暮らし向きが急変するような経験はしていないことなど、必ずしも社会的に不利な出来事が累積しているわけではなかった。しかし、未婚で子どもがいなかったため、60 代で両親と死別後、一人暮らしになり、職場

時代の友人やきょうだい・親戚と、徐々に連絡が途絶えていくなかで、高齢期に孤立状態に至っていた。同様に、事例4では、もともと親が資産家であったこと、一定の学歴があること、会社経営者であったこと、婚姻経験があって子どもがいることなど、とくに社会的に不利な経験を累積しているわけではなかった。しかし、この事例では、50代後半に任意破産をし、妻からの離婚申し立てがきっかけとなって、他者との交流を拒絶するようになり、高齢期に孤立状態になっていた。

一方、非孤立群に該当した事例5では、幼少期の両親やきょうだいとの死別だけでなく、初職が不安定職で、その後も定職に就いていないこと、婚姻経験はあるが間もなく離婚し子どもがいないこと、ホームレス経験があることなど、幼少期から社会的な不利が累積していた。このため、この事例では、学生時代や職場時代の友人、あるいは、親戚関係との交流はなかった。しかし、高齢期に、現住宅に転居したことがきっかけで、今までにない親しい友人関係を形成し、現在は孤立状態にはなっていなかった。

このため、これらの事例は、少なくとも、高齢期の社会的孤立との関連においては、ライフコースを通じての累積的な有利・不利という概念では説明できない部分があることを示唆しているといえる。

2．孤立群と非孤立群の関連要因：ブール代数アプローチ

つぎに、孤立状態に関連する要因を検討するために、以上のような事例を踏まえて、未婚であること(S)、健康状態が悪化したこと(H)、親しい友人を転居(入院)あるいは死別によって喪失したこと(F)、現在サークル活動や老人会等に不参加であること(A)を投入し、孤立群(Ｉ)および非孤立群(ｉ)になる組み合わせを分析した。ブール代数アプローチの手続きに即して、真理表、主項と必須項を求めた結果が**表3**と**表4**である。なお、大文字は各変数が該当すること、小文字は該当しないことを示している。

その結果、孤立群になる組み合わせとして、

$$I = sHF + SHA + SFA$$
$$= sHF + S(HA + FA)$$

が求められた。同様に、非孤立群になる組み合わせとして、

$$i = hfa + sha + sfA$$
$$= hfa + s(ha + fA)$$

表3　真理表

行番号	独立変数				従属変数	
	婚姻経験(未婚=1)	健康状態(悪化=1)	友人の喪失(あり=1)	老人会等(不参加=1)	孤立状態(孤立群=1)	事例数
1	1	1	1	1	1	1
2	1	1	0	1	1	1
3	1	0	1	1	1	2
4	1	0	0	0	0	1
5	0	1	1	1	1	2
6	0	1	1	0	1	1
7	0	1	0	1	0	3
8	0	0	1	0	0	3
9	0	0	0	1	0	2
10	0	0	0	0	0	1

表４　主項と必須項の導出

	孤立群(Ｉ)の要因			非孤立群(ｉ)の要因		
大文字の個数	2	3	4	0	1	2
最　小　項	sＨＦａ	ＳＨｆＡ ＳｈＦＡ sＨＦＡ	ＳＨＦＡ	ｓｈｆａ	Ｓｈｆａ ｓｈＦａ ｓｈｆＡ	sＨｆＡ
第１次縮約 （主 項）	sＨＦ	ＳＨＡ ＳＦＡ ＨＦＡ		ｈｆａ ｓｈａ ｓｈｆ	ｓｆＡ	

主項	孤立群(Ｉ)の要因 最小項 sＨＦａ	ＳＨｆＡ	ＳｈＦＡ	sＨＦＡ	ＳＨＦＡ
sＨＦ	◎			○	
ＳＨＡ		◎			○
ＳＦＡ			◎		○
ＨＦＡ				○	○

主項	非孤立群(ｉ)の要因 最小項 ｓｈｆａ	Ｓｈｆａ	ｓｈＦａ	ｓｈｆＡ	sＨｆＡ
ｈｆａ	○	◎			
ｓｈａ	○		◎		
ｓｈｆ	○			○	
ｓｆＡ				○	◎

◎は必須項。

が得られた。

すなわち、高齢期に孤立状態となる組み合わせとして、単身世帯のなかでも、a)「未婚者以外」の場合は、サークル活動等の参加有無に関わらず、「健康状態が悪化し、親しい友人を喪失している」こと、b)「未婚者」の場合は、「健康状態が悪化し、サークル活動等に参加していない」、または、「親しい友人を喪失し、サークル活動等に参加していない」ことに整理された。

一方、孤立状態にならない組み合わせは、a)未婚であるか否かに関わらず、「健康状態が良好で、親しい友人を喪失していなく、サークル活動等に参加している」こと、b)「未婚者以外」で、かつ、「健康状態が良好で、サークル活動等に参加している」あるいは「サークル活動等に参加していないが、親しい友人を喪失していない」ことに整理された。

【考　察】

これまで高齢者の社会的孤立に関する研究では、高齢期には配偶者や友人との死別などによるネットワークの縮小を経験するものの、大半の場合、孤立状態にならないことが国内外で一致して確認されてきた(Shanas et al. 1968、Townsend 1957、金子 1987)。他方で、そうした孤立状態にある高齢者は少数であるため、研究方法上の困難を伴うが、その重要性は過小評価されるべきではないことも指摘されている(Findlay 2003)。とくに、近年、主要な先行研究が30年以上前のものが多いこと、孤立の定義自体が多様であること、質的研究が乏しいことなどの課題が指摘されている(Victor et al. 2000)。そこで、本研究では、少数の事例調査の結果をもとに、ライフコースの観点から高齢者の社会的孤立の背景と、孤立群と非孤立群の関連要因について、予備的な分析を行なった。

本研究の結果から、第１に、高齢者の社会的孤立の背景に関しては、ライフコースを通じて社会的な不利が累積した結果として高齢期に孤立するというモデルは必ずしも適合しないことが示された。具体的には、孤立群に該当した高齢者のなかでも、親との早期死別や不安定就労、未婚や離別といった「生涯を通じて不利が累積した孤立」と同時に、高齢期以前からの不利で

はなく、高齢期の生活状態の変化の結果として「高齢期の不利による孤立」があることが示唆された。これらは、Lowenthal(1964) や Bennett(1980)が示した生涯孤立(lifelong isolate)と高齢期の孤立(recent isolate)という分類について、ライフコースの不利の累積という観点からも同様に確認されることを示唆する結果といえる。

そのうえで、高齢期の不利による孤立のなかでも、配偶者・同居の親・きょうだい・友人の喪失や本人の外出困難といった加齢に伴う本人および周囲の人の健康状態の悪化による孤立だけでなく、高齢期の財産上のトラブル、家族関係の不和、他者への不信感といった社会的・経済的な出来事によって孤立した事例がみられた。これらの結果は、孤立状態にある高齢者への支援を検討する際に、現在進められている介護予防や閉じこもり予防のような健康に着目したアプローチが有効な孤立だけでなく、高齢期および高齢期以前のライフコースを通じての社会的・経済的な不利に対する支援が重要となる孤立があることを示唆するものと考えられる。

第2に、高齢者の孤立の諸要因に関しては、孤立状態に関わる要因の組み合わせに注目した結果、未婚者と配偶者との離別者および死別者では異なる組み合わせが得られた。しかし、いずれも高齢期の孤立状態を説明できる単独の要因はみられず、親しい友人や知人の喪失、本人の健康状態の悪化、老人会やサークル等の社会活動への不参加の組み合わせによって、規定されることが示された。

これは、未婚による子どもの有無に関わらず、加齢に伴う友人やきょうだいの喪失と同時に、本人の健康状態の維持と社会活動への参加が困難になった場合には、孤立状態にならないための支援・介入が必要であることを示唆するものといえる。とくに、現在、一人暮らし高齢者対策として、市町村の行政や社会福祉協議会などで電話訪問や配食サービスなどが進められているが、上記のような高齢者に対しては、前述した孤立状態の背景の多様性を踏まえた支援・介入の検討が、重要な課題になると考えられる。

なお、本研究は、17ケースという極めて少数の事例をもとにした予備的な検討であるため、結果の一般化には限界がある。今後は、統計分析が可能な数の代表サンプルによる調査・分析を実施した上で、本事例で示唆された点について、再度検討していく必要がある。

【引用文献】

Bennett R : The concept and measurement of social isolation. Bennett R (ed) Aging, isolation and resocialization. Van Nostrand Reinhold, 9-26.

Crystal S & Shea D : Cumulative advantage, cumulative disadvantage, and inequality among elderly people. *The Gerontologist*, **30**(4) : 437-443. (1990).

Dannefer D : Cumulative advantage/disadvantage and the life course ; Cross-Fertilizing Age and Social Science theory. Journals of gerontorogy : Social Sciences, **58B**(6) : S327-S337. (2003).

Dugan E & Kivett VR : The importance of emotional and social isolation to loneliness among very old rural adults. *Gerontologist*, **34**(3) : 340-346. (1994).

Findlay RA & Cartwright C : Social isolation and older people ; A literature review. Australasian Centre on Ageing: Ministerial Advisory Council on Older People. (2002).

Findlay RA : Intervention to reduce social isolation amongst older people: Where is the evidence? *Ageing and Society*, **23** : 647-658. (2003).

後藤昌彦・山崎治子・飯村しのぶ、ほか：都市における高齢者の社会的孤立. *高齢者問題研究*, **7** : 73-90. (1991).

金子勇：都市高齢者のネットワーク構造，社会学評論，**38** : 336-350. (1987).

鹿又伸夫・野宮大志郎・長谷川計二：質的比較分析. ミネルヴァ書房，(2001).

河合克義・菅野道生：港区におけるひとり暮らし高齢者の生活と社会的孤立問題；孤立問題分析の基礎視角構築のために. *賃金と社会保障*. **1432** : 4-35. (2006).

LaVeist TA. Sellers RM. & Brown KA. et al. : Extreme social isolation, use of community-based senior support services, and mortality among African American elderly women. *American Journal of Community Psychology*, **25**(5) : 721-732.(1997).

Lowenthal MF : Social isolation and mental illness in old age. *American Sociological Review*, **29**(1) : 54-70. (1964).

Mullins LC, Sheppard HL, & Andersson L : Loneliness and social isolation in Sweden: Differences in age, sex, labor force status, self-rated health, and income adequacy. *Journal of Applied Gerontology*, **10**(4) : 455-468. (1991).

O'Rand AM : Cumulative advantage theory in life course research. *Annual review of gerontology & geriatrics*. **22** : 14-30. (2002).

Ragin, CC : The comparative method: Moving beyond qualitative and quantitative strategies. University of California press, (1987).

Shanas E, Townsend P, Wedderburn D et al. : Old people in three industrial societies. Atherton press, (1968)

下仲順子・中里克治・河合千恵子ほか：中高年期におけるライフイベントとその影響に関する心理学的研究. *老年社会科学*, **17**(1):40-56. (1995).

Thompson MG.. & Heller K : Facets of support related to well-being ; Quantitative social isolation and perceived family support in a sample of elderly women. *Psychology and Aging*, **5**(4) : 535-544, (1990).

Townsend P : The Family Life of Old People, An Inguiry in East London. Routeledge and Kegan Paul. (1957). (山室周平 訳「居宅老人の生活と親族網；戦後東ロンドンにおける実証的研究」垣内出版, (1974))

Tunstall J : Old and alone : A sociological study of old people. Routeledge and Kegan Paul. (1966). (光信隆夫 訳「老いと孤独 ：老年者の社会学的研究」垣内出版, (1978))

Victor C. Scambler S. & Bond J. et al. : Being alone in later life : Loneliness, social isolation and living alone. *Reviews in Clinial Gerontology*, **10** : 407-417. (2000).

Wenger GC, Davies R, & Shahtahmasebi S et al. : Social isolation and loneliness in old age: Review and model refinement. *Ageing and Society*, **16**(3) : 333-358. (1996).

Wenger GC & Burholt V : Changes in levels of social isolation and loneliness among older people in a rural area; A twenty-year longitudinal study. *Canadian journal of aging*, **23**(2) : 115-127. (2004).